

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第一11:23～26 「聖餐式の意義」

[23-24]「私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。『これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。』」

パウロはコリント人たちに対して主の晩餐、つまり聖餐式の時の混乱を鋭く指摘してきたが、ここで主イエス・キリストはこのことについて何と言われたか、その原点に立ち返って、あるべき姿を教えていく。

エルサレムでの最後の晩餐の席上で主イエスはパンを取り、感謝をささげられた。この感謝はこれから主イエスを通して成し遂げられる神の救いと、それによる新しい契約の制定を思っただけのことであつたであろう。私たちもこの主を通して成し遂げられた神の深い愛の計画を思い、感謝しつつ聖餐式にのぞまなければならない。主イエスは弟子たちに分け与えるためにパンを裂き、「これはあなたがたのための、わたしのからだです」と言われた。これについての4つの解釈がある。①ローマ・カトリックはこれを文字通りにとり、司祭の司式によってパンは本当のキリストの肉そのものとなり、ぶどう酒は本当のキリストの血そのものに変化する。パンとぶどう酒の成分、色、形、味はそのままでありながら、その実態はキリストの肉と血に変化するという。これは実体変化説、または化体説という。これは「パン」と「からだ」を直接的に等しいものと解釈したところから出てきている。②宗教改革者マルチン・ルターは、みことばに従って聖餐が行われる時、そこにキリストが現実におられる。キリストはまさにパンの中に、パンと共におられると理解した。これを共在説という。③宗教改革者ツヴィングリはパンもぶどう酒も単にキリストを象徴するだけと解釈した。これを象徴説という。④宗教改革者ジャン・カルバンは次のように言う。「キリストは確かに天におられる。しかし、聖餐にあずかる者が、霊において、キリストのからだと血にあずかることができる」。つまりキリストは聖霊によって霊的に臨在される。単なる象徴ではないし、超自然現象でもない。聖餐がみことばに基づいて執行され、信仰によって受けられる時、そこにキリストが霊的に臨在される。これが改革派や長老教会の立場。

[25]「夕食の後、杯も同じようにして言われました。『この杯は、私の血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。』」

かつてモーセを通して与えられた契約は動物の血によって確かなものとされた。→出エジプト19:5～8, 24:3～8。これは新しい契約に対して、古い契約(へブル8:13)、旧約と言われる。これは一時的、儀式的、律法的なものであるが、新しい契約は永遠の神の御子キリストの血による。それは罪の永遠の贖いと神との個人的な交わりを保証するものである。それゆえ、聖餐式においてこの杯を飲んでキリストを覚えることは、新しい契約のもとにあることを私たちに思い起こさせるのである。

[26]「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」

「主が来られるまで」として聖餐式は終わりの日まで続けられることが教えられている。

「主の死を告げ知らせる」とはただキリストの十字架の苦しみ、死を記念するだけでなく、やがて王の王、主の主としてもう一度来られる主キリストを待ち望むということも意味する。このようにキリストの十字架と未来の救いの完成を待ち望むという二つの面が聖餐式にはっきりと表わされている。私たちはこの聖餐式の時において、神の救いの計画を集中的に体験される者とされるのである。→ヘブル9:24~28